# そこに学校があった

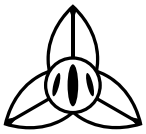
## 休廃校の歴史

平成以降に休廃校になった学校を中心に振り返ります。

## 興津小学校（上）

### 校章に込められた人々の思い

校章に地区における学校の位置づけが表現されている。興津を構成する三つの地区の人々の思いが真っ直ぐに伝わるデザインである。モチーフとなっているのは3枚の桜貝。桜貝は興津の美しい砂浜の象徴で校歌にも登場する。この3枚の桜貝は「浦分」「郷分」「小室」の興津3地区を表していて、その真ん中に「小」の文字がある。興津小学校は地区の核であるという宣言でもあったのだ。



3枚の桜貝の真ん中に「小」の文字

### 生徒一人につき毎月米二升

学制発布から2年後の明治7（1874）年1月開校。校名は修道学舎（修道館の記載も）。8歳から13歳までの20名の生徒で始まった。修道学舎の名は儒教の文献にある「道を修むるこれを教えという」に由来する。窪川町史でも紹介されているように、開校時の教員の給料は「米五石（約750kg強）／年」。また、生徒授業料「一人米二升／月」とある。ただ「生活困窮の場合は戸長（村長）の認印をもらい学校に許可を得ること」という救済策も併記されている。学制は「邑（村）に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す‥」さらに「幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしむべき‥」と明記された法令である。これを受け、時の戸長（村長）は、村の全ての子どもが通学できるようにと、この救済策を設けたのであろうことが窺える。

### 苦労した教員の確保

興津地区に限らず、全国的に教員の確保には苦労した。それもそのはずで、つい数年前まで庶民の子どもの教育といえば「読み書き算盤（そろばん）」が主であったのに、急に西欧に倣（なら）った幅広い知識と技能を教えることになったのである。簡単に人材が見つかるわけがない。そこで、当時としては「学識がある」とされた、藩校卒業生、神職、医師、僧侶などに白羽の矢が立った。興津修道学舎でも僧侶が教員としてその任に就いた。名は浜崎蔵六といい、就任時40歳。土佐郡弘岡村の元武士で幕末に僧侶となる。漢学に長け、また、嘉永6年から安政4年まで諸国を旅した経験を持つ人物だった。この全国行脚の5年の間には、安政元年の南海トラフ巨大地震（東海地震・南海地震）以外に、江戸、青森、伊賀上野（三重）でも相次いで大地震があった。蔵六はこの時どこにいたのだろうか。仮に被災地にいなかったとしても、どこかで被災地の惨状を耳にしたに違いない。蔵六が初代校長となった修道学舎は、約130年後に「防災の興津小」となるのである。（次回に続く）

尋常科6年、高等科3年制となった明治40年の写真が残っている

### 町のうごき

| （8月31日） | 人　口 | 前月比 |
|---|---|---|
| 男 | 7,047 | -15 |
| 女 | 7,593 | -3 |
| 計 | 14,640 | -18 |
| 世帯数 | 7,874 | -9 |

| | 出生 | 死亡 | 転入 | 転出 |
|---|---|---|---|---|
| 男 | 0 | 8 | 5 | 12 |
| 女 | 1 | 7 | 14 | 11 |
| 計 | 1 | 15 | 19 | 23 |

（8月中の届出）

窪川地域 10,459人　大正地域 2,013人　十和地域 2,168人

四万十町通信　2025.10月号　Vol.235（毎月10日発行）
●発行／四万十町企画課　●印刷／弘文印刷
〒786-8501　高知県高岡郡四万十町琴平町16-17　(0880) 22-3124　FAX (0880) 22-3123

UD FONT by MORISAWA　本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。